

曲名：さだめ唄

作詞作曲：横山英昭

十九の春を 花ぬ島
父さん母さん すこやかに
年に一度の ジュリ馬祭り
シャンシャンシャンの 鈴の音は
シャンシャンシャンの 鈴の音は
哀しい女の さだめ唄

踊りも三線 (しゃみ)も 覚えたの
育ててくれた アンマーに
吉屋の鶴(チルー)の 恩返し
シャンシャンシャンの 鈴の音は
シャンシャンシャンの 鈴の音は
売られた女の さだめ唄

銀のかんざし 辻(チージ)の華
生きて添えない あの方に
せめて一夜の 慰めを
シャンシャンシャンの 鈴の音は
シャンシャンシャンの 鈴の音は
尽くす女の さだめ唄

さだめ唱

作曲 横山英昭

作詞 横山英昭

The image displays a musical score for the song "Sadame Uta" (さだめ唱). The score is written in 4/4 time and consists of five systems, each with a vocal line and a guitar accompaniment line. The key signature is G minor (Gm). The guitar accompaniment is primarily in a simple, rhythmic pattern, often using a single bass note (G) and a chord (Gm). The vocal melody is written in a standard staff with a treble clef and a common time signature. The score is divided into measures by vertical bar lines. The first system shows the beginning of the piece, with the vocal line starting on a whole note G and the guitar accompaniment starting with a Gm chord. The second system continues the melody, with the vocal line moving to a half note G and then a quarter note G. The third system shows the vocal line moving to a quarter note G and then a half note G. The fourth system shows the vocal line moving to a quarter note G and then a half note G. The fifth system shows the vocal line moving to a quarter note G and then a half note G. The guitar accompaniment in the fourth system has a red box highlighting the first measure and a blue box highlighting the second measure. The score ends with a double bar line and a repeat sign.

【楽曲の背景】

現在の沖縄県はかつて琉球王国であった(1429年～1879年の450年間)。中国と大和の間に位置する南海の島々は交易で栄え、人々は平和に暮らしていた。ところが1609年大和の薩摩藩島津氏が侵攻し武力に劣る琉球王国は事実上崩壊してしまう。以来農村の暮らしは困窮を極め、やむを得ず子女を売るものが続出した。大和支配が皮肉にも遊郭の村「仲島(ナカシマ)」や「辻(チージ)」を生み育てることとなっていったといわれている。

1672年、王国は琉球各地にいた多数の娼婦たち(ジュリ(尾類)と呼ばれていた)を現在の那覇市辻町一帯に集め、技芸の教養を身に付けさせ、冊封使や大和商人のもてなしをする遊郭を作ったのである。その昔王国の都首里芸能は男性中心の文化であったが、辻の女性たちによって現代の女性中心の琉球芸能文化が育まれた。そんな辻遊郭も沖縄戦の空襲で全焼し、一夜にして300年の歴史を閉じてしまったのである。

この曲は身売りされた少女たちの悲しい運命(さだめ)を唄うものである。辻遊郭では育て親(アンマー)が親代わりとなり、実の親に会うことが許されなかった。そこで年に一度、女たちが馬を模した衣装を身に付け、シャンシャンシャンと鈴を鳴らし、行列をなして街路を踊る奉納祭りが行われた。その日だけは生みの親が遠方から来て、遠目でわが子の無事を見ることができたという。今も毎年その祭りだけが保存会の手で残されている。しかし娼婦社会と蔑視された辻遊郭の歴史は、戦後沖縄の社会では否定されてきたという。戦後ブルドーザーで均された現在の辻一帯には当時の御嶽(ウタキ)以外に時代を偲ぶものは何一つない。虐げられながらも力強く生きた琉球女性たちの生きざまに歴史の正しい評価がなされないまま、いずれ人々の記憶から消え去ろうとしている。辻遊郭の存在は大和侵攻、先の沖縄戦、米国統治から現代もなお基地の島として続く沖縄の人々の苦難の歴史そのものではなかったか。

横山は、失われた女性社会の「辻」を現代人の記憶に呼び戻そうと、その舞台となった「辻村」と戦争で一夜に焼失した那覇を「小説 1010」に書いた。この楽曲は、小説の挿入歌として自ら作詞作曲したものである。